

G・C・リヒテンベルクのアフォリズムスをめぐって

Der Witz ist der Finder (finder)
und der Verstand der Beobachter
(G.C.Lichtenberg)

佐々木 滋*

そもそもリヒテンベルクの書き残されたものの魅力は何か、と問われれば「きわめて先鋭なものとそのもっとも深遠な思索とが、優美さと調和している」ことにあり、「こうしたものの併存・共存は他のいかなる作家もかれには匹敵しない」と答えられる¹⁾。真正な存在をめぐる憂慮はかれの内部では子供の遊び好きと剽軽者のまじめな態度と一対をなし、かれの思考対象は現実そのものであり、自我と世界構造というこのふたつの世界と対決させるものは言葉の世界と新聞紙上の一切であった。これらの特色がかれのノートに記された個々の記入と警句である。研究意欲の旺盛さは事物界と人間界に向けられ、それは、かれが言葉として好む言語界への不信、かれが嫌う新聞界への嘲笑とである。この自我と世界構造は晩年のかれの思考と意識の内部で互いに切り離せないものとなる。この双方いずれもが制約し、説明し合う。言葉のもつ虚飾性にもめげず人間には言語界を必用とされるが、広い意味で新聞の一切は精神、心、道徳的判断から弾劾される²⁾。

かれは一観察者でもある。そのまなざしは事物および精神的なものなかでもっとも微妙なものを暴露し、世界構造の歴史と人類の歴史のなかで広がる視点を遠くにまで及ぼす。

十八世紀も終わろうとする十ヶ月前にリヒテンベルクは五十六才で亡くなった³⁾。シュリヒターグロルの「物故者名士略伝」にはリヒテンベルクについて「有名大学の有名教師」、「われわれの時代の最も機知に富んだ作家のひとり、最も趣味豊かな学者のひとり、いずれの愚鈍にも反対するきわめて適切な闘士のひとり」として讃えられる。学者としてのかれは「主たる学問・物理学」において自然学、天文学、数学を教える当時のドイツでは最も著名な教授としてその名声を（二重に）博したと伝えられ、実験物理学の分野ではほぼ教祖的存在であり、センセーションを巻き起こしたリヒテンベルクのシュタウプフィグーレン（塵芥像）の発見者としての名声を得、とくにそれに期待されたことは電気の理解を解き明すであろう、とされたことにあった⁴⁾。学者に無縁でもない文学者というには必ずしもかれには当てはまらぬものがある。かれは亡くなるまでの二十年間、とりわけ婦人界むけの銅版画入りの小型本『ゲッティンガー・タッシェン・カレンダー』のほぼ毎号の寄稿者として、また一七八〇年から八五年に及ぶゲッティンゲン学術・文学誌の発刊者、さらにカレンダー寄稿文

* 一般教育 助教授 ドイツ文学

を刊行本にした『人相学について、再び人相学者』（1778年）および一七九四年以降予約出版で著した贈呈用本『ホガースの銅版画についての詳説』⁵⁾などの著者として知られた。一七七三年から七六年の間の半ば論駁的にして半ば風刺的な著作は神学者と文学者間の領域を踏み越えるものではなかったが、ホームロスの翻訳者ヨハン・ハインリヒ・フォスに対してなされた二つの冷酷、機知に富む論文は幅広く刺激をよんだという⁶⁾。自然研究者としてのリヒテンベルクの名声の広がり、かれの人生の最後の数年間には、酸素を用いた「熱素」の完全代用に関する新理論に対しあまりにも長い間反対したことで、終えたようにみえた。さらにジャン・パウルと並んで国家きってのもっとも聡明かつユーモアに富み、辛辣な作家であるとは認められるが、一般的にはドイツ擬古典主義とその影響領域、すなわち近代文学への繋がりを怠ったかのようにさえ見える。擬古典主義、浪漫派の興隆、ジャン・パウルと比べるとかれの著作は輝きを失い、おそらくは次第に文学史家以外の人々には忘れられていった。ところが予期せぬことが起こる。リヒテンベルクの死後かれの友人であり出版者であったディーテリヒ⁷⁾が、「ある部分は物理学的であったりある部分は混ざり合った内容のかれの遺稿の一部刊行」を告げたのである。それらは「たいていが短い文章、個々の考え、所見、機知に富む着想、新しい見方、諸問題……からなりたち、ものごとを考察するかれの仕方、かれの精神がみとめられる」というものであった。リヒテンベルクの名声を一九世紀にあらたに根拠づけようとしたものは、まさにこの「無かった文書類」に他ならず、それはかれ自ら『ズーデルブーフ』と称するものである。かれはまたそれを“殴り書き帳、ウェイストブック、下書き帳、あるいは思索帳”などとも繰り返す。かれによればこの「雑記帳方式」がいちばんのお勧めである。なぜならそれは「数ペニヒの真理の節約によって」豊かにさせるからであり、その点に「あらゆる詳細による」着想が詳説され、そして「事柄に習熟するようになったのちにはじめてその着想が必要な簡潔さにおいても表現を得る」とされるものである。⁸⁾

「商人たちは自分のウェイストブック（ドイツ語では下書き帳、雑記帳に相当するとわたしは思う）を持っている。そのなかにかれらは毎日購入するもの、売るものの一切を無秩序に乱雑に記入する。これをもとにそれは全てが系統立っている仕訳帳に記入され、そして最後にイタリア式の複式簿記による原簿で帳簿をつけるにいたる。この帳簿のなかではとりわけどんな男も清算をつけられ、しかも最初は債務者として、次に債権者として向い合う。このことは学者も見倣らうべきものである。まずは、わたしが見たままに、自分の考えをわたしに吹き込む一切をそこに記入する帳面が最初で、次にこれが諸々の素材がより多く区分され整理される他の帳面へと記帳できる。そうすると原簿は事柄についての結びつきとそこから流れ出る説明をきちようめに表現できよう。」
(E-46)

一八〇一年に九巻の最初の二巻が『混合の書』として、狭められた精選と恣意的配置・編纂のもとに刊行されたとき、カント、ゲーテ、ジャン・パウル、シュライヤー・マッハーおよびアレクサンダー・フォン・フンボルトらのように、リヒテンベルクの偉大さをすでに認めていたひとたちの間では、この思索の書はまだかれの秘密のままであった最良のものへの驚異

の念が強まったに違いない。リヒテンベルクの箴言集⁹⁾はゲーテ以外では「何度も繰り返し読まれる」ことにだけ役立つ四大ドイツ語散文作品のひとつだ、と言ったニーチェの言葉が作用し始める今世紀に漸くその魅力が、殊に戦後驚くべきテンポで増したという。

リヒテンベルクの百もしくは二百ものよく知られた警句と機知とユーモアを超えたものをこそかれの著作に価値を与えるためには、かれの思考との親密さは確かにわれわれに要求される¹⁰⁾。かれの同時代人のだれひとりとして人間の秘密をかれ以上に知るものはいなかった。かれは学問上の厳めしさをういずにその人間を記述したのであり、そのことがかれの成果である。精神科学が個人の生命に潜んだ衝動、複雑性をも暴露し始め、その仮装を理解し始めて以後かれの成果については知られている。無意識の作用反作用、そのあらわれとしての夢、「昇華」、補償（アルフレート・アドラーが用いる意味での）、意識の閾での諸現象そしてとくに言語形態学の全域、これら一切をリヒテンベルクは見たのであり、手際よく暗示してくれたのである。

*

リヒテンベルクが箴言作家であるには文学ジャンルの歴史による確認を必要とする。このことはジャンルに固有の問題性も伴う。ジャンルの歴史は何を以てそれに即応するのかを第一に個別作品から獲得しつつ、その所属性に決定をあたえるものであるが、ジャンルの歴史がそこに発見するものは、その推移とともに本質的なジャンルの徴候が変遷を遂げてゆくことである。そこで時代を超えた有効なジャンルの定義は放棄せざるを得なくなる。たかだか形式的可能性の周辺を書き直し得るにすぎない。かれの記録を「箴言」と称することに躊躇ったり、「ナイーブな箴言作家」と言えない研究は、こうした困難さを反映する。研究は幅広い論究のためにこうした問題をオープンにさせる限り、たしかにリヒテンベルクの思索帳の箴言的性格を一応、自明なものと受け入れはしても、いずれその作品が前提とされるタイプに相応しからぬという理由で、かれの稿の大部分が未製品もしくは「拡大された箴言」として排除を余儀なくされる別の方向に直面するのは理由のないことではない。

フランス・モラリスト
 仏・道徳主義者たちの金言や格言を模範としての判断に役立てたことはドイツ・箴言術の
 アフォリスティク
 定義化について偏見なき研究を妨げた。そこにみられるものはパスカルからシャンフォールに至りさらに現代に及ぶまでの特定領域の文学の力であり、ロマン語圏の形式・ジャンル意識の力とでもいうものであった。近代の箴言・概念はドイツからのものであり、しかも仏・モラリストの諸作品を手がかりに形成される。匿名選集「エスプリのエスプリ」(1793年)の独語版翻訳はフリードリヒ・シュルツによって『人間学と処世哲学の箴言集』と題された後の一八〇一年にはブテヴェクが十七世紀の仏・アフォリスムスについて述べる。このように概念は最初から仏・芸術ジャンルの考え方に重圧をかけられ、リヒテンベルクの箴言の理解には用いることができなかつた。

リヒテンベルク自身が仏・モラリストたちに好意を示した評価は疑いの余地はない。ラ・ブリュエールのことは、心理学的ポートレティストの理想として一七六五年に言及され¹¹⁾、一七七四年以降は幾度もラ・ロシュフーコーの格言^{マクスィーム}が自分の精神的所有下に移ったと述べる。

「ある考えを書き付けたとき、すぐさま最高の形式に行き当たった人間がいたといわれる。わたしはそのことをあまり信じない。もっと多くの考えを振りむけたなら、表現はもっとよくならぬか、より短い言い回しが言い当たらぬものか、初めは必要と思った幾多の言葉を省けぬものかといった問題が必ず残る。だが、こうしたことはもともと無用な説明でしかない。少なくとも賢い読者にとっては。(……) ある考えをきわめて純粋に表現するためには非常に沢山の洗い落としと垢おとしがその一部をなす。ちょうど体をきれいに見せるように。このことを納得するには初版の『ラ・ロシューフーコーの省察』を後の版と比較されたし...」(J-268)¹²⁾

「それは予知され望まれていた、と人々が信じていることを人生の思いがけぬ事件を己の利益のために利用する術を心得ることは、しばしば幸運といわれ、世間では男を成功させる。確かにこの規則をただ知りそして常に精神のなかに持っていることがすでにひとつの強さである。ラ・ロシューフーコーの判断によるとレッツ枢機卿はこの特性を高い職位で所有していたという。」(J-273)¹³⁾

リヒテンベルクが執筆作業下にこうした文章修練を重ね、何が諸々の覚え書きの解釈を生み出すのかを確認して見つけ出したことは疑いのないことである。それでもかれにとって仏・モラリストたちは模範たり得なかった。かれの持ち出す箴言的なもののふたつの要素はフランス的格言の本質に属するものではなく、むしろ比較的古い時代のに帰属しているようである。

「(……) すでに私が挙げた特性は、世界を首尾よく学ぼうとするだれもが持つべきものである。かれらは歴史記述家、詩人、法学者、雄弁家もしくは医師かもしれない。かれらはいつの時代にもタキトゥスからセルバンテスにいたる真実と虚構の歴史のなかで大作家の特徴を示す傾向があった。このような諸能力を見誤った天才は、もしも、ある性格を作り上げるために自身をあてるならば、さらに情熱と闘うことを学ばねばならない。この情熱は学問の世界では政治的世界一般の情熱と同様に情熱を機知によって輝かせようとする重要な結果になり得る。機知と根本的なものがまれに同居する、というこのことはひとつの非常に一般的な論評であるが、意見を越える機知の力は、どうでもよい人からすると、このふたつは言われている以上によく感じ取られるものである。われわれには言葉の影響から意見におよぶ優れた著作がある。文体での機知と習慣的なものの影響からも同じように主張できるように思われる。きわめて厳格な真理が表現法の快適さと結びつくべきところではそのような著作には大いに有益であろう。これについて私ははっきりと説明をしよう。すでに数千年来、作家たちのあいだで流行っていることにこんなことがある。叙述される人物がことのほか高潔であるか、ふしだらであるかのどちらかであったり、または高潔と不道德の類希な混合を兼ね備えている場合、作家がある性格を構想するとき、作家たちは常に自分たちの普段の表現法を数段上の偉いものと思っている。ここに対立にたいする対立が起こり、他の時代に対する均衡する時代が続き、そして性格の形成において天性は機知に富むものではないから、また反対命題は気取っ

たものではないから、天性のとらわれぬ愚直さはきわめて面倒な抽象によってもごく自然なものには取り戻せ得ぬグロテスクな被造物となっている。」¹⁴⁾

アンティテーゼと均衡の時代はリヒテンベルクにとって真理を損いやすいもののようにみえた。ラ・ロシューフーコーのメランコリーやヴォーヴナルグの隠遁のこの両方がある距離を与えたにしても、フランス古典主義は遂に社会の精神的気候下で成長する。仏・アフォリズムスは内容豊かな会話のエスプリにより栄光と緊張を迎える。一方、リヒテンベルクは、「われわれドイツ人と英国人が機知とウイットのもとに理解する」フランス人のエスプリに断固として対抗を示す。

「(……) かつてフランスで “si un Allemand peut avoir de l'esprit?” とする問題に公然と論議されたことがあった。Non Messieurs と私は答えたことであろう。というのはかれらは、われわれがその言葉に理解するものをエスプリのもとで理解しているからだ。かれらの言い分は正しいが、われわれおよび英国人が Witz, wit のもとに理解しているものをかれらはエスプリのもとに理解する (……)」E-332¹⁵⁾

ボーデ¹⁶⁾ はモンテーニュの自らの翻訳をスターンの「トリストラム・シャンディ」に準拠して『多種多様なものに関する思考と意見』(1793年)と題して公にする。ヘルダーはこの二つを同一視して「おそらくだれも人間の弱さと感傷の最小にしてささいなものの依存関係をモンテーニュとヨリック以上に豊かに、自然に認めたものはいない」と評した¹⁷⁾。かれらはこの時代のための人間観察者の典型を代表する。モラリスト・モンテーニュの抱える不信、学者の言葉と杓子定規への不信、これらの不信が古典懐疑派の流れを汲むものではあっても、かれの自己省察は哲学的であって、リヒテンベルクのこの作家への意識的遡及は認められない。モンテーニュの思考は十八世紀末の箴言的なものの流行の温床形成に影響したことは否めない。スターンの箴言的な精神姿勢が間接的にボーデの翻訳を通して知られる。フランス的なものと並んでイギリス的な「感傷」という新しさを表現する芸術の源泉が開かれることになる。ヨハン・フリードリヒ・バウマンの翻訳『一英国人の箴言と空想』(1792年)もそうした影響下に生まれる¹⁸⁾。この本はばらばらの数多くのスケッチ風の小作品、性格描写、風刺的観察を含む誘惑された娘、高い地位階級の乞食、カフェーでの一言居士、居候、女役者、新聞、お喋り屋といった心理タイプがセンチメンタルな姿の傍らに登場する。こうした作品で注目すべきことは、文化史的にみても、それらの本がはじめて心理的な素材と箴言概念を重ね合わせて関連させていることであろう。すでに挙げた『エスプリのエスプリ』が一七九三年に仏・マキシムによる概念をもたらしただけだが、同時に「人間学」、「人生哲学」といった言い方を含めて伝えられる。リヒテンベルク自身は自分の書いた『雑記帳』にアフォリズムスと言いつつ表すことはできなかった。この概念はその当時としてはまだ古いアフォリズムスに留保されたままであった。かれの目の前にこの言葉がちらついていたことは確かである。

「講義のために一般的に用いることができる基盤にしてはたいいていの物理のハンド・ブ

ックはあまりにもまわりくどい。それらに欠けているものはアフォリスティックな簡潔さとその一部をなす表現の的確さである。基盤に用いられる教科書はその学問の核心のみを、またはきわめてぎっしりと詰められた簡潔さの業を含まねばならない。どの行にも教師が言及したものを説明するきっかけをすぐに見つけられるように。」¹⁹⁾

箴言的なものへの結びつきをかれは一七七九年から八八年に確立する。かれは古い聖書、ギリシャ・ラテンの作家たちのなかに、沢山の徳の教え、心強くする金言を発見し、「これらが経験から最も明るく照らす頭脳によって集められ、全人生行路の引き綱にも喩えられ、遂にはこうした財宝のなかに預けられる」。またかれが誇るのは「まさにこの古代の人々の分別、かれらが持っている才能がひとりの観察者自身の心に語りかけ得る……このことがひとつの世界認識と人生の哲学の主要な特徴である。」

フィールディングの道徳的所感と英国的人間観察もリヒテンベルクにとっては人生の哲学である。そのもとにかれは「調査」、「人間的な自然」を生き方のその応用として理解を深めてゆく。敬虔主義的なものと感傷的なものの基本特徴がかれの箴言的な表現に出会った一方で、仏・アフォリスムスは十八世紀最後の十年間にドイツの著作界に進入する。『人間学と処世哲学の箴言集』が示したものはこの時代に分散した箴言的なものとその他の要素を伴ったフランス的なものとが人生の哲学と融合した結果、フランス的な基本特徴が際立つことになった。孤独な自己観察者と感傷的な観察者が仏・マキシムに手を出すのではなく、社交的な男がそれをするのである。ガルヴェによると「人生の哲学とは真の社交の基本であり、興味ある談話の主要材料」²⁰⁾とされ、仏・アフォリスムスの社交的性格が浸透する。仏・モラリストたちの著作水準とはとうてい比較し得ぬ好色文学もその概念を奪う。世紀末にはその類があらわれるのだが、模倣の無力さだけが目立つ。

「フランス・道徳主義アフォリスムスの促進する照射もみられぬ結果となった歴史的領域の制限によって、リヒテンベルクの思考は真のアフォリスムスであるという推定的事実、他方、これが確かであれば、ドイツ・箴言術は自立した創作として存在することの可能性がともかく獲得される。こうした確信をあたえるにはニーチェの証言で足りる。ドイツ語の代表的箴言家が「ドイツの散文の宝」について自分の文章のなかではっきりと、リヒテンベルクのアフォリスムスについて語る時、このことはひとつの確認を超えてほぼリヒテンベルクの精神的祖先のすべての認知をかれの口調で意味する。ニーチェがフランス風の金言で研ぎ澄まされたにせよ、リヒテンベルクの所見がその形式に即応しなかったことをニーチェは見通せなかった。だからかれの判断はドイツ・箴言術の存続を保証し、ニーチェのアフォリスムスだけがフランスの源泉に由来するという一意見の吟味のために促されるのである。」²¹⁾

ギリシャ・アフォリスムスの再現者であるエラスムスとベーコンはこのジャンル成立を古典の時代へと押し戻す。ギリシャ古典期よりアフォリスムスは学術的な報告形式として弱々しくも殆ど途絶えることのない伝統下に、近代の意識には疎遠なままに、十九世紀まで伝わる。このことも文学のアフォリスムス・ジャンル概念だけに限られていたことにその原因がある

ようだ。アフォリズムスのまとまりのある理論はベーコンがようやく発展させる。多少古い時代の成立と生成への歴史的意識は一連の動因を明らかにする。この動因がのちにリヒテンベルクの箴言術の体系的表現の内部で摂取されることになる。古典期・アフォリズムスは、その発端をなす根幹を詩人、散文家の金言、予言、エピグラム、諺とさまざまなものにもっていた。この多種多様な素性とでもいふべきものが、さまざまな付随形態 Apophthegma, Gnome, Hypotheke などとの類縁性を可能にしているものの、幹が分岐したように覆い隠される結果となった。²²⁾はやくもこの初期の時代に大別して、世界観的な事実の確認と自然科学的な事実の確認というふたつのものが分岐する。このジャンルの根源についての曖昧性は古典期の定義では取り除けぬものがある。雄弁家・ヘルモゲネスは命題を備えた簡潔さを強調するが所説への箴言的ひろがりには閉ざされ、関連性から解かれたプラトンとデモクリトの所説が、かれにはアフォリズムスとみなされる。ギリシャ・箴言術の主要作品、ヒポクラテスの「箴言集」がようやく新しい問題を課するにいたる。医者であるかれの箴言が箴言文学に制限されず、医学がこのジャンルを貴重なものとして守ってきた素材、延いては、形式の作用がそこにある。言葉の簡潔さ、短さという点では、このジャンルの特徴は伝統的なものになる。法学、政治学、天文学、人類学などの学問分野が発展するなかでアフォリズムスはその報告形式として役立てられたのだが、医学・自然科学的な部門領域がやはりその優位を守り通すのである。

ベーコンによってアフォリズムスはその決定的な段階に達する。かれは体系^{システム}に対して学的伝達形式としてそれを対照させる。²³⁾

「だが、最初にして最も古い真理の探究者は、事柄の観察から真理を得、そして有益に用いようとした知識をアフォリズムもしくは短く、撒かれた、どんな体系にも縛られぬ金言を理解するのが常であった。」

リヒテンベルクの『思索の書』の統一性は、特定の領域をかれの瞑想下に優遇したにもかかわらず、主観的体系の緊密さのなかにも素材的関連性のなかにも存在せず、書くことの自我のなかにある。箴言的思考は開かれた明澄な思考として、例外思考、折に触れての思考としてこの精神性の解決する力をいっそう多くあらかわすその間に浮上する根拠を自己思考として示す。

ヘーゲルは、

「私がただ（私なりに）思いこんでいること、これは私のものであり、この特殊な個人としての私に属している。しかし言葉はただ普遍者だけを表現するものである以上、私は私がただ（私なりに）思いこんでいるにすぎないようなことを言うわけにはいかない。だから感情とか感覚とかいうような、言葉で言い得ないものは最もすぐれたもの、真なるものであるどころか最も重要ならざるもの、最も真ならぬものである。」

と述べる。²⁴⁾ところがリヒテンベルクにあっては主観性の表現が重要であり、そのなかで感覚の認知への信頼によって強固にされる。

「先入観なくただ吹き込まれたし。われわれの感覚上の道具のなかには誤りはない。もし、われわれが利口すぎたり愚か者であるならば、むしろわれわれの読むことと先入観のなかには誤りがある。」²⁵⁾

かれは「われわれの体験の偽らぬ声」を聴こうとして「ひとは自己の感情に従うべきであり、ある事柄がわれわれに及ぼす最初の印象を言葉で言い表すべきである」(E-450)とする。

意見の真理内容は、体系がその有効性をそれで受け入れる尺度では測りきれない。ヘーゲルにとって「体系なしに哲学するということがあるにしてもそれはなんら学的なものではありえない」²⁶⁾、ものだが、リヒテンベルクにとって、まさしくこの自我から解放された体系こそが真実を欠いたものなのである。自我は知識の不確実性のなかで、諸々の可能な体験の無限性のなかでいつまでもとどまるが、この領域で誠実に獲得されるものがかれの血潮となる。

「自分の熟考によって発見したもの、目算の対象でないもの一切に、ひとは取りかかり始めるべきだとわたしは思う」²⁷⁾

ふたつの真理観がある。ソクラテスにおけるものとアリストテレスにおけるものであり、キルケゴールにおけるものとヘーゲルにおけるものとである。それぞれが対峙しあう。

リヒテンベルクにあっては模範の破壊は自己目的ではなく内部の解放である。よく知られたもの、秘密の体系にある抵抗が追求され、とくにすべての人々に通用している意見のなかでの追求がなされる。外見上周知の日常領域での自己観察の収集は、すでに因襲的な見解に反対する抗議でもある。かれの文章の反立的な構造のなかで、こうした抵抗が認められる。対照のひとつの側面は、いままで真実と思われていたものを表現し、他方の側面はかれがみずから熟考と体験によって獲得したものを表現する。「世界の最大の物事」は「われわれが見落とす小さな原因によってもたらされる」とするかれの所感はすでに早くにみられる。

リヒテンベルクの箴言術は三重の方法で防御の姿勢をとる。それは、かれの真理志向に押し進められて体系と具体的思考の言語との対決下にあるものであり、かれの誠実さが制約される崇高なものに対する「低きもの」の尊重であり、そして、ファンタジーと機知による結合的思考として展開されるものである。一七七三年にリヒテンベルクはベーコンの箴言思考への結びつきを得る。ベーコンとともにかれは体系の敵たることの告白をする。

「かの高名なベーコンはすでこう言った。そしてわれわれは、学問がある体系のなかで持ち込まれる限り、そこではもはや多くのことは発見されないことを本当のこととして発見した」この考えをかれは「ドイツ人の神話のための愛国的寄与」のなかで述べる²⁸⁾。さらに同年の第二のかれの所感は真剣さをのぞかせる。

「ベーコンが体系の有害性について述べることはどの語についてもいえることである。すべての階級を表現する多くの言葉、もしくは、梯子全体のすべての段は、個人としてのひとつの段によるもののように必要とされる。」(C-276)²⁹⁾

ベーコンを読むときかれは『Novum Organum』³⁰⁾の第一の書・第45に行き当たる。

「ベーコンの語ることのすばらしさ、少しばかりの秩序を理解する人間はすぐにもあまりにも多くを推測する。」(J-1054)

リヒテンベルクはあらゆる領域からの事実、旅行見聞録、研究家の体験、自分で発見したものなどを集めながらかれの『ゾーデルブーフ』を書き満たした。ベーコンはアフォリズムスと兼ねて体系に対する観察もあてがった。したがって観察とはアフォリズムスと同じ意味ではないまでも近い関係にある。リヒテンベルクの観察の僅かな部分は、その形式に即してみれば、フランスの格言と比較し得るが、それは箴言思考の結晶であり、かれはそれを観念的に消化するかもしれぬし、あるいは事実として記録するのかもしれない。

註

- 1) Franz H. Mautner : Lichtenberg Bildnis seines Geistes, in : Georg Christoph Lichtenberg Schriften und Briefe, hg. von Franz H. Mautner, Bd. 1, Frankfurt am Main, 1983, S. 7.
- 2) GCLSB. Bd. 1.: SudelbücherのJ-1212, J-1198, J-1125, L-299を参照。
- 3) Wolfgang Promies : Georg Christoph Lichtenberg, Hamburg, 1964, S. 151.
- 4) Schriften und Briefe. hg. von Wolfgang Promies, München, 1968, Bd. III, S. 25, S. 27, Bd. VI, S. 278.
- 5) GCLSB. Bd. 3. S. 5-394.
- 6) Im "Göttingischen Magazin": Über die Pronunciation der Schöpse des alten Griechenlands verglichen mit der Pronunciation ihrer neuern Brüder an der Elbe, および Über Hr. Vossens Verteidigung gegen mich im März / Lenzmonat des Deutschen Museums 1782.
- 7) Jahann Christian Dieterich (Dierck) (1722-1800). ゲティンゲンの出版者。かれ宛には166通の書簡がある。
- 8) GCLSB: Bd. 1. S. 221.
- 9) ここではむろん『Sudelbücher』のことであるが、箴言とは独語で Aphorismus, 羅句語も aphorismusus である。Aphoristik は一応、箴言術という言葉をも本稿で用いた。
- 10) 池内 紀 編訳『リヒテンベルク先生の控え帖』を参照。
- 11) GCLSB: Bd. 2. S. 7-11.
- 12) GCLSB: Bd. 1. S. 385.
- 13) GCLSB: Bd. 1. S. 386.
- 14) GCLSB: Bd. 2. Von den Charakteren in der Geschichte. S. 9-10.
- 15) GCLSB: Bd. 1. S. 250-251.
- 16) Johann Joachim Christoph Bode (1730-1793) 作家、出版者、Stern と Fielding の翻訳者。かれ宛には四通の書簡がある。
- 17) Herder: Gesammelt Werke. Suphan, Bd. VIII, S. 209.
- 18) Baumann, Johann Friedrich: Aphorismen und Fantasien eines Britten, Dresden / Leipzig, 1792. Original: Satirical Miscellanies of an Englishman, London, 1784.
- 19) Physikalische und mathematische Schriften. Hg. v. L. Chr. Lichtenberg und F. C. Kries, Göttingen, 1803-06. VI, S. 335.
- 20) Garve, Christian: Versuche über verschiedene Gegenstände aus der Moral, der Literatur und dem gesellschaftlichen Leben, Breslau, 1797. Teil 3: Über Gesellschaft und Einsamkeit, S. 45.
- 21) Paul Requadt: Lichtenberg, Hameln, 1948 S. 114-115.
- 22) Schalk, Fritz: Das Wesen des französischen Aphorismus, Die neueren Sprachen, Bd. 41, 1933, S. 133.
- 23) Francis Bacon, The Works, Vol. I, S. 194 (Novum Organum, Aph. LXXXII)
- 24) G. W. F. Hegel: Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften § 20 (Gesammelte Werke Bd. 19. Düsseldorf, 1989, S. 47.) 邦訳は榎山欽四郎訳の河出書房新社版『ヘーゲル、エンテュクロペディー』(1968年)を参照。
- 25) GCLSB: Bd. 1. S. 286.

- 26) Hegel, a. a. O., §14. S. 40-41.
- 27) Lichtenberg : Vermischte Schriften Göttingen, 1844-53. in : Paul Requadt, Lichtenberg, S. 129
- 28) GCLSB : Bd. 2. S. 17-26.
- 29) GCLSB : Bd. 1. S. 159.
- 30) 註 23) 参照。